

学園だより

— 母校の近況 —

小樽商科大学教授

学生部長 山本眞樹夫



一九九六年七月に学生部長の職を拝命し、半年近くになるうとしています。まだまだ新米で戸惑うことや失敗の連続です。実はこの原稿もすつかり失念しており、編集の方々にご迷惑をおかけしました。この場をかりてお詫び申し上げます。私は一九七二年に本学の学部を卒業し、その後開校間もない本学の大学院に進学しました。大学院は第二期生ということ

になります。その後、博士課程進学、他大学勤務を経て一九八二年に本学に赴任しました。本学勤務も十四年となります。学生時代の六年間を加えると二十年近くも本学で過ごしたことになります。また三十年近く本学の変化を観察させてもらったことになります。その間、緑丘の上という場所こそ変わりませんが、外見そして内容と大きな変貌をとげています。現在、日本の大学は十八歳人口の減少という事態に直面し、また良質の人材を大量に送り出すという役割を終え、戦後の学制改革以来の激動期を迎えようとしています。

本学もこうした動きに超然としていられるはずもなく、生き残りをかけた改革を進行させているところです。昔日の「北に一星あり」と言われた存在感を取り戻すのは、まさに今進行している大学改革をいかに成功させるかに掛かっているといても過言ではありません。

この改革は単に学内だけの議論でできるはずもなく、卒業生の力も大いに活用させていただかなければなりません。開学八十周年を期に設けられた「緑丘ファウンド」は、こうした改革を進めていくうえで、きわめて頼もしい味方となつております。改めて御礼申し上げます。

さて、大学改革にかかわる本学の近況として、平成九年度入試より学科別入試を導入したこと、平成九年度より旧来の大学設置基準に縛られないカリキュラムを導入したことが挙げられます。以下、簡単にその趣旨と概要を説明してみたいと思います。

学科別入試

現在、本学には経済学科、商学科、企業法学科、社会情報学科および商業教員養成課程の四学科一課程が設置されています。従来、入試は商学部全体で行い、二

年次に進級するときに、本人の希望と一年次の成績で各学科課程に所属していった。

しかし、学科の内容が多岐にわたり、それぞれの学科にふさわしい学生を同一の試験で判定することには無理があること、また入学当初より明確に志望する学問分野を意識した学生を選抜したい、などの理由により、平成九年度入試から学科別入試をすることになり、すでに夜間主コースの推薦、社会人特別選抜試験は終わっております。

この入試制度の導入により、実質的には四学部に相当する入試を一学部で行うことになるわけですから入試業務は相当きついものになります。また、各学科別の合否判定も従来より相当難しいものとなります。

しかし、上記に述べた理由のほか、本学が伝統的な商学部以上に多様な研究教育体制をもつことを社会に広く認知してもらうには、学科別入試は意義あることだと思います。受験生の多くは、本学で

本格的な法律学やインターネットなど高度情報通信に係わる学問を学べるとは思っていないでしょう。本学がもつ学問資源を有効に活用するには、まずそれらを広く知ってもらうことも大事です。学科別入試がそうした役割を果たし、理系を含めた多様な受験生が本学を受験してくれることを期待しているわけです。

カリキュラム改革

大学設置基準が大学に対すること細かな規制をはずし、カリキュラムも相当程度各大学の自由に任せられるようになりました。日本中の大学が教養部を含めた大学改革に必死になっているのは周知のとおりです。自由であることは、生き残りをかけた競争を意味するからです。本学でも平成九年度から従来の一般教育科目の改革を含めた新カリキュラムへ移行することになります。

新カリキュラムの特色は、従来の一般教育科目を共通科目と称し、幅広い分野にわたり一年次から四年次まで学生の問

題意識に応じて柔軟に履修できるようにしたこと。また共通専門科目という新たな科目群を設定したことです。

共通専門科目は共通科目に基礎を置きながらも、ミクロ経済学や簿記論などと同様に専門科目として扱われます。

また共通専門科目担当教官によるゼミナールも設けられています。したがってたとえば日本文学に関心を抱く学生は共通科目、共通専門科目およびゼミナールと一貫して教育を受けることができ、卒業論文も日本文学の先生の指導のもとに書くことができるわけです。あるいは商学を主専攻としながらも化学を副専攻的に履修することもできます。

このように従来の一般教育担当の先生の学問資源を最大限に生かそうというのが今回のカリキュラム改革の特徴です。もちろんカリキュラム改革はこれで終わるわけではありません。これからの大学は社会の変化にあわせて常に改革途上にあらねばなりません。

以上、入試とカリキュラムの二点について簡単に説明しましたが、これらは秋山前学生部長の下で計画されたものであり、さしあたり私の任務は、この二点をいかに円滑に軌道に乗せるかということです。この二点についても、卒業生を含めた全学的な協力体制があつて始めて実現することができません。

微力ではありますが、なんとか学生部長としての任期をまっとうしたいと思ひますので、ご協力を宜しくお願い致します。